

- Japan. J. Appl. Phys., 13(1974), p. 250
- 10) J. EGGERT: Z. Phys., 20(1919), p. 570
- 11) M. N. SAHA: Proc. Roy. Soc., A99(1921), p. 135
- 12) H. W. DRAWIN: Reactions Under Plasma Conditions, ed. by M. Venugopalan, (1971), p. 94 {Wiley, N.Y.}
- 13) G. HERZBERG: Molecular Spectra and Molecular Structure. I, Spectra of Diatomic Molecules, (1950), p. 123, 125, 467 {D. van Nostrand}
- 14) F. WEVER, A. ROSE, and H. EGGERS: Mitt Kaiser-Wilhelm-Inst. Eisenforsch, 18 (1936), p. 239
- 15) H. EGGERS and W. PETER: ibid., 20 (1938), p. 205

「分析研究の立場」

分析技術者の功献なくしては近代鉄鋼業の発展はあり得なかつたといつても過言ではないであろう。一般に科学の進歩は、その重要な部分を測定技術の進歩に負っており、測定技術の最高の水準を駆使することによつて実験研究者は、思考過程に新たな視野を持つことができると考えている。

今回企画された鉄鋼分析に関する特集は、一般冶金研究者あるいは技術者の蒙を開き、さらに一段の飛躍の機会を与えるものとして、正に時宜に適したものといえよう。

最近では技術の進歩とともに、研究対象の分化が進み、広い視野に立つて研究を進めることがややもすればおろそかになり勝ちであるが、いわゆる学際的な研究活勝が重視されるようになったのも、この傾向を裏書きするものと考えられる。冶金研究者と分析研究者との間にも同様の関係があると考えられるが、両者のコミュニケーションを密にすることが研究効率を高めるために重要であろう。

冶金研究者は、従来ややもすればあり勝ちであつた単に分析技術者を利用するといつた考え方をあらためるとともに、分析研究者においても冶金研究者の悩みに常に關心を持ち、相互の理解と協力のもとに研究の効率化をはかるべきである。

分析技術については、現場分析の自動化は当然さらに進められるとして、微量分析、微小部分の局所分析、元素分析から状態分析への要望が高まると考えられるので分析研究者の一層の奮闘を期待するものである。

—(株)神戸製鋼所浅田基礎研究所所長, 現日本高周波鋼業(株)専務取締役 菅野 五郎—